「家族」から排除される女性たち
―「居場所」の人類学からの報告―

桑島　薫（名城大学）

発表者は、文化人類学（人類学）の立場から、日本社会において家族に「居場所」を失った女性たち――路上生活を余儀なくされた少女たちやDV被害女性など――の現実に向き合ってきた。本発表では、DVシェルター、保護施設、路上という三つのフィールドでの民族誌的調査から得られた、暴力と家父長制が交差する現場の経験や語りを紹介する。そして、「家族」と個人（特に女性たち）の「居場所」の問題をどのように再考できるかについて展望を示したい。

人類学は、現場での参与観察や聞き取りを通じ、そこで生きる人々の具体的な経験を掬い取る学問である。個別具体な事象のなかに、権力関係や構造的問題が浮き彫りにされる。発表者は日本におけるDV被害者支援や女性保護の現場を長年にわたり調査しながら、暴力、家父長制、親密性といった主題を通じて、特に女性の生とその周縁化の構造を考察してきた。

米国で1980年代に始まったフェミニスト人類学は、「女性」というカテゴリーの内に存在する多様性や、普遍的なフェミニズムが成り立たないことを強調してきた。とりわけ、西洋中心主義的な主流派フェミニズムを批判してきた第三世界フェミニズムやブラック・フェミニズムの言説は、ローカルな社会を生きる女性の現実を捉える人類学の視点と響き合う。特にブラック・フェミニスト人類学者は、当初から家父長制を単なる性差別以上の構造として批判し、階級、人種、ジェンダーなどが交差するなかで家父長制が作動することを指摘してきた。

一方で、ここ十数年、英語圏のフェミニスト研究では、家父長制という概念が問題含みであるとして用いられなくなりつつあるという。日本のDV研究でも家父長制という言葉は、暴力を生む前提条件を示す常套句のように使われ、それ以上、分節化して議論されることは少ない。こうした用語を文脈において再検討する力を持つ人類学は、現在の家族研究に大きく貢献しうると考えられる。人類学研究として、家父長制が日常に潜むさまざまな抑圧や権力と交差しながら、どのような具体的な形態をとっているのかを、より丁寧に探求する必要がある。

報告の後半では、日本の都市における若年女性の「居場所支援」活動を取り上げる。親からの虐待やネグレクト、心の病、いじめ、貧困など、さまざまな理由で家や地域から居場所を失ってしまう少女たちがいる。そうした少女たちの多くは、都市の繁華街などに集まり、そこが「家族」とは異なる「居場所」となっている現実がある。彼女たちは一見、自らの意思で環境を選んでいるように見えるが、フェミニスト地理学者が指摘するとおり、実際には都市空間は家父長制、資本主義、女性抑圧の権力が交差する場である。また、居場所の確保は孤立対策として各所で進められ、支援活動の拠点は広がりを見せているが、根本的な排除の構造そのものは温存されたままである。生き延びようとする個々人の切実な経験、創造的な戦略やレジリエンスなどが社会的な場所との関係においていかに生まれているのか。こうした考察を重ねるなかで、家父長的な権力や抑圧をすり抜ける可能性や契機が見出されはしないか。本発表では、この視点を踏まえて「家族」や「居場所」の意味をともに考えたい。

（キーワード：家父長制、フェミニスト人類学、居場所）